

日本女子大学文学部日本文学科蔵

『安永四年八月十五夜会』翻刻と紹介

壬 生 里 巳

はじめに

日本女子大学文学部日本文学科蔵『安永四年八月十五夜会』（写本。以下、『安永四年夜会』とする。）は、安永四（二七七五）年八月十五日に仙台藩第七代藩主伊達重村が主催した歌会の記録である。重村は、祖父吉村や父宗村の影響もあり、学問文事を好んだことで知られる。福井久蔵氏によれば、近衛閑白・白前・日野資枝・柳原光綱・冷泉為村らに点を請い、「土井利徳・青木一貫・酒井忠以・松平康致・伊達村候の諸侯并に藩士大内義門田邊希文等の唱和多」とい⁽¹⁾う。

本稿は、『安永四年夜会』を翻刻するとともに、出詠者やその和歌を取り上げ、重村の文芸活動の一端を紹介するものである。

一 書誌情報と翻刻

まず書誌情報は、以下の通りである。

写本、原表紙、香色、外題なし、一冊、巻首題「安永四年八月十五夜会」、紙数十二丁、二十四・三纏×十七・二纏、七行書、蔵書印、裏表紙の左下に「那須郡烏山町／宇多遠五郎／宇多遠

五郎／代書人世多恒志」、右上段にも、上下反転した形で「那須郡烏山町／宇多遠五郎／代書人世多恒志」とある。

翻刻は、以下のように行った。

- ・私に歌番号を付け、清濁を区別した。
- ・現行の字体に改めた。
- ・書き込みは、（ ）で括って記した。

【翻刻】

安永四年八月十五夜会

秋月自澄江

左中将重村

- 1 浪も今宵月のこほりにとぢられて
よるとも見えじ難波江の秋

下総守坂上村隆

- 2 ことうらの詠もあれど難波江や
こ、ぞ秋なる月のくまなさ

伊勢守源康道

- 3 あかすらむ影も今宵は名にはれて
波路くまなくすみの江の月

4 すめる夜の月影うつす難波江や
藻に埋もれぬ玉と見るまで
(平賀藏人) 源義雅

5 秋といへば入江のみづのこゝろにも
まかせてすめる月のさやけさ
(遠藤兵馬) 藤原保孝

6 雲霧は空につくして住の江の
なみもしづかに照す月かけ
(志賀孫之丞) 源時氏

7 秋風になみのうす霧吹はれて
そらもくまなく住の江の月
(山田) 松林

8 とこがらこゝろあはせて影うつる
月のひかりもすみのえの秋
(小野寺) 格安

9 難波江やあしの葉そよぐ浦風に
ゆふ霧はれて月やすむらん
(嶋津権五郎) 源定義

10 秋にすむ月の光りの清ければ
玉江の波のよるとしもなき
(堀越兵馬) 藤原親盈

11 夕附日いり江の波に影とめて
よるともわかぬ月やすむらん
(茂木弘見) 源義明

(熊沢小源太) 紀定安

12 芦の葉のつゆの玉江に波風の
おともしづかにすめる月かけ
(長江甚三郎) 藤原孝善

13 くもらじなみがく玉江に夜もすがら
光りをそへてすめる月かけ
(玉虫十蔵) 平尚茂

14 岸に生ふる松ならねども名にしおふ
ひかりはいくせ住の江の月
(入江権太夫) 藤原清昌

15 江をひろみさはる梢も浪の上に
すむ影きよし秋の夜の月
(大内喜四郎) 多々良直繁

16 夕しほのさすがまたる、難波江の
みちぬる浪にすめる月影
同夜当座

17 雲と見し春もあれどもからにしき
をりはふ山ぞたちまさりぬる
秋山 重村

18 はるごとの詠めあれども秋ふかき
露に八しほの岡のみみぢ葉
秋岡 親盈

19 あかず見む秋の千種のいろく
咲そふ野辺のはなの夕ばへ
秋野 義雅

秋草 尚茂

20 大方の花をも云はじこれぞこの
ちくさの露の盛りひさしき

秋木 義明

21 千々の秋も君ぞ見るべき露霜に
そまぬ軒場の松のみどりを

秋鳥 保孝

22 聞もうし野沢の霧の夕暮に
ものおもわする鳴の羽かき

秋虫 定義

23 夜と共にたゆみもはず誰ために
はた織むしの音にたつらん

秋恋 定安

24 むすぶてふ草葉の露は稲妻の
ひかりかよはず契りだにあれ

秋夢 格安

25 古郷をしのおまくらにおもひ寝の
みしもはてなき秋の夜の夢

秋祝 格安

26 かげさゆる月のかつらに君が代の
くもらぬ秋をそらに仰がむ

講師 義明

奉行 親盈

27 いろ／＼になくてふむしの声なくば
霜とや見まし月のさやけさ

源時氏

28 世のうきのおもひはよそに曇なく
月しづかなる夜半の虫の音

松林

29 長月のくまなき影にあこがれて
ふりはへ出る鈴むしのこゑ

格安

30 露わけて月のみやどる浅茅生の
そこにやたれをまつ虫の声

源定義

31 澄月の露をたづぬるした草に
をのれあるじと松むしのなく

藤原親盈

32 めであかぬ心しられて虫の音も
共にさへゆく長月のかげ

源義明

33 月にふく風の梢の闇のみ
あきとなきしぞむしの声々

紀定安

34 くもりなき月にはあかで更る夜も
誰とへとてかまつむしの声

藤原孝善

35 問ばやな人まつ虫の声そへて
あかぬ今宵の月の光りは

平尚茂

36 秋野、の葉の露の月影に

やどりあらそふむしの声々

藤原清昌

37 誰かたへ月よみしとはつげぬらん

こてふに似たり松むしの声

多々良直繁

38 やどしつる露の葉草のねもころに

月をこととふむしの声々

同夜同座

十三(夜)月 義明

39 晴にけりひとよばかりかなみならぬ

月をふたみかうらみなきまで

見月 義雅

40 君が世のくもらぬ影やうつしむむ

ひかりますみの月の鏡に

松間月 定義

41 峯たかみはるかにたちし山松の

このまをつとふ月のさやけさ

草露月 格安

42 見よやいま千種の花のさまざまに

つゆもいろわく月のさやけさ

菊籬月 保孝

43 咲つゞく籬の菊の露ごとに

やどれば月のかげも匂へる

都月 清昌

44 くもりなき月の桂の光りこそ

花の都の名にしおふらぬ

峯上月

45 秋はまつ木々の梢の色よりや

ひかりてりそふ嶺の月かげ

野月 尚茂

46 見渡せばいづくを空のはてとだに

月にわかたぬ武蔵野の原

河月 定義

47 澄のぼる月も今宵は名取川

やな瀬の魚のかづもわかれて

寄月祝 重村

48 唐人のかくとはしらし治れる

よを長月の月の光りは

講師 定義

奉行 孝善

二 『安永四年夜会』の出詠者について

安永四年八月十五夜会の出詠者は、次に挙げる総勢十六名である。なお、『安永四年夜会』での表記は「」で示し、()内の数字は、『安永四年夜会』での出詠歌数を表す。

伊達重村(3)、田村「坂上」村隆(1)、松平「源」康道(1)、平賀「源」義雅(3)、遠藤「藤原」保孝(3)、志賀「源」時氏(2)、山田松林(2)、小野寺格安(5)、島津「源」定義(5)、堀越「藤原」親盈(3)、茂木「源」義明(4)、熊沢「紀」

定安(4)、長江「藤原」孝善(2)、玉蟲「平」尚茂(4)、入江「藤原」清昌(3)、大内「多々良」直繁(2)

坂上村隆は、一関藩四代藩主。仙台藩五代藩主伊達吉村の五男で、重村の叔父にあたり、六代藩主宗村の逝去に伴い、十五歳の重村が藩主となるにあたって、実質上の後見人の役割を果たした人物である。松平康道は、『寛政重修諸家譜』六に、「安永三年十二月十八日従五位下伊勢守に叙任す」とある。彼らを除く、十一名が仙台藩の家臣たちである。

このうち、平賀義雅は後の天明五(一七八五)年に仙台藩奉行となった人物である。義雅は、志賀時氏とともに祖父吉村時代からの家臣で、和歌を善くしたという。『仙台人名大辞書』では、堀越親盈、茂木義明、入江清昌を歌人と立項する。山田松林、小野田格安はともに医者である。松林は明和四(一七六七)年に番医近習となり、安永七年に一〇〇石の禄を得たこと、格安は、京都の浅井氏に医術を学び、藩医を務めたことが記録として残っている。

本稿では、彼らと重村との関係を考えるため、重村が主催した歌会への参加状況を見ていきたい。今回、重村が主催した歌会の記録として確認できたものは、以下の通りである。

①明和二年正月九日會始(宮城県立図書館伊達文庫・国文学研究資料館マイクロ)

②明和三年八月一五夜御會(宮城県立図書館伊達文庫・国文学研究資料館マイクロ)

③明和四年正月九日御會始(宮城県立図書館伊達文庫・国文学研究資料館マイクロ)

④明和五年九月十三夜會(宮城県立図書館伊達文庫・国文学研究資料館マイクロ)

⑤六十賀後宴詩歌留「内題「安永三年朔日六十賀後宴和歌」(齋藤報恩会・国文学研究資料館マイクロ)

⑥安永八年十月廿八日 月次会兼題/安永八年十月廿八日 当座(日本女子大学日本文学科蔵)

⑦仙府侯名月御会(内題「天明六年八月十五夜會」)(仙台市民図書館・国文学研究資料館マイクロ)

これらの歌集に『安永四年夜會』の出詠者の歌が記録されているかどうかをまとめたのが【表1】である。この表から、明和と安永期にかけて志賀時氏、島津定義、堀越親盈、茂木義明がほぼすべての歌会に出詠する。『仙台人名大辞書』によれば、定義の碑文に「始め書役を以て進み、尋で小姓より近習に遷り……書及び兵学を究め、旁ら和歌典礼学故に通ず」とあるという。また、定義は義明とともに歌会で何度も「講師」を務めている。「講師」には、歌会で料紙に書かれた和歌及び題・作者の読み上げを行う役目があるが、出席者の中では比較的身分の低い、和歌の知識を持つ者が選出されたという。²⁾「奉行」は、歌会の取りまとめを行う者を指す。ちなみに、安永八年十月の歌会は、田村村隆、越後藩主牧野忠清、廣通(石乃平蔵)、橘千蔭といった名士たちを招いて行われたものであるが、³⁾定義、親盈、義明、清昌が参加していたことは、彼らが重村文化圏の中心人物であったことをうかがわせる。

ところで安永三、四年の歌会に参加している玉蟲尚茂は、明和六(一七六九)年二十五歳のときに、仙台藩儒田辺希文が藩命で編纂した地誌『封内風土記』を清書し、翌年『伊達世臣家譜』の編集、『伊

(む)に「住の江」という地名を掛けたり、風に吹き払われはつきり表れた月の光を「くまなし」「さやけし」と表現し、月に照らされた美しい入り江の情景を描いた歌が多い。

7 秋風になみのうす霧吹きはれてそらもくまなく住の江の月

(松林)

9 難波江やあしの葉そよぐ浦風にゆふ霧はれて月やすむらん

(高津定義)

どちらの歌も、秋風よつて薄霧が吹きはらわれて、そこに出た月の美しさを讃える内容である。7は、「住の江の月」に地名「住の江」と「澄み」を掛ける。9では、「浦風にゆふ霧はれて」と月が澄んだ理由を説明する。

また、十六首中五首で「難波江」の情景を取り上げている。

1 浪も今宵月のこほりにとぢられてよとも見えじ難波江の秋

(伊達重村)

2 ことうらの詠もあれど難波江やこ、ぞ秋なる月のくまなき

(田村村隆)

4 すめる夜の月影うつす難波江や藻に埋もれぬ玉と見るまで

(平賀義雅)

1の「月のこほり」は、澄んでいて氷のように見える月。ここでは波が「こほりにとぢられ」たかのように寄せることもなく、海面にはつきりと月影が映っているさまによって、歌題の、澄んだ入江の光景として描き出す。2「ことうら」は、他の浦。「わすれじな難波の秋のよはのそらこと浦にすむ月はみるとも」(新古今和歌集・巻四・秋上・四〇〇・宜秋門院丹後)がある。難波江の秋の月の美しさを讃える。4は、「なにはえのものにうづもるる玉がしはあらは

れてだに人をこひばや」(千載和歌集・巻十一・恋一・六四一・源俊頼)と詠まれたように、難波江の藻に埋もれた石を月に見立て、海辺の静かな情景を描く。

このように「秋月自澄江」という歌題では、「澄江」から連想される静かな入江をどのように描くかという点に重きを置いた詠みぶりとなっている。

結びに

最後に、安永四年八月十五夜会は、安永八年に各界の名士を呼んで興行された、いわば大名家の歌会とは異なり、その多くは無名に等しい藩士たちであった。そうした点では、重村と仙台藩士たちとの私的な会であったと言えよう。しかし、この会に参加した玉蟲尚茂は、のちに評定所役人、町奉行所仮役、目付使番、伊達領地郡代、郡奉行などを歴任する活躍を見せ、特に、天明の飢饉の際には藩に上申した『仁政篇』は、すぐれた藩政改革論として注目された。また、入江清昌も、寛政三(一七九一)年に重村の近侍となり、『伊達治家記録』や重村の歌集『掬月集』の編纂に携わっている(世臣家譜・世臣家譜統編)。このような人材を輩出する場となった重村主催の歌会に着目することは、彼の学問奨励政策の成果を知るうえでも意義があると考ええる。

なお、『安永四年八月十五日夜会』以外の和歌の引用は、『新編国歌大観』に拠る。

注(1) 福井久蔵『諸大名の学術と文芸の研究』(原書房、一九七六年)。

- (2) 『和歌文学大辞典』(古典ライブラリー・二〇一四年)「講師」の項参照。
- (3) 福田安典「伊達家の歌会(吉村・村倫・重村の和歌)―日本文学科所蔵資料から」『国文目白』第六十号、二〇二二年二月 参照。
- (4) J. F. モリス『近世武士の「公」と「私」』仙台藩士玉蟲十蔵のキヤリアと挫折』清文堂出版、二〇〇九年、二十六頁。
- (5) 「秋月自澄江」の先行歌として「舟つなぐかけをやくまと白波のよるよる月はにぎり江もなし」(碧玉集・卷三・五六〇・下冷泉政為)「かもめゐる入江の水のころをやそら行く月も友とすむらん」(雪玉集・卷三・秋・一三七六・三条西実隆)がある。

受贈雑誌(三)

| | |
|--------------|-------------------------|
| 国語と教育 | 長崎大学国語国文学会 |
| 國文學 | 関西大学国文学会 |
| 国文学研究 | 早稲田大学国文学会 |
| 国文学研究資料館紀要 | 国文学研究資料館 |
| 国文学研究ノート | 神戸大学「研究ノート」の会 |
| 國文學攷 | 広島大学国語国文学会 |
| 国文学試論 | 大正大学大学院文学研究科 |
| 國文學論叢 | 龍谷大學國文學會 |
| 国文白百合 | 白百合女子大学国語国文学会 |
| 国文鶴見 | 鶴見大学日本文学会 |
| 国文論叢 | 神戸大学文学部国語国文学会 |
| 古事記學 | 國學院大学研究開発推進機構研究開発推進センター |
| 語文 | 大阪大学国語国文学会 |
| 語文 | 日本大学国文学会 |
| 語文研究 | 九州大学国語国文学会 |
| 語文と教育 | 鳴門教育大学国語教育学会 |
| 語文論叢 | 千葉大学文学部日本文化学会 |
| 相模国文 | 相模女子大学国文研究会 |
| 「作家特殊研究」研究冊子 | 法政大学大学院人文科学研究科 |
| | 日本文学専攻 |